

序 章

1991（平成3）年に大学設置基準が大綱化され、各大学がそれぞれの理念・目的にそって、教育研究活動の見直しと効果的な教育システムの構築を図ることが求められる時代に入り、本学においては「京都外国語大学学則」第2条に「教育研究水準の向上を図り、本学の目的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。」と定めた。この目的を達成のため、1991年度から毎年、京都外国語大学のアカデミックな活動を、Ⅰ．総論、Ⅱ．教育研究の内容・方法等、Ⅲ．学生の受け入れと送り出し、Ⅳ．教育研究のための人的体制、Ⅴ．研究活動、Ⅵ．施設・設備、Ⅶ．付属図書館、Ⅷ．学生生活、等の大項目でまとめた『京都外国語大学アカデミックレポート』を刊行しており今回17回目になる。1993年には、「京都外国語大学自己点検・評価規程」を制定し、学長を委員長とする「自己点検・評価運営委員会」を設置し、自己点検・評価実施計画の策定及び対象とすべき分野・項目の設定を業務とした。2002年の学校教育法の改正により、認証評価制度が導入され、それに対応するために本学における『自己点検・評価規程』も改正し、その目的を「外部評価及び認証評価並びにそれらの評価結果の検証すること」とし、2004年から開設された「点検評価調査室」の室長を委員長とする「自己点検・評価運営委員会」が業務を遂行している。また2004（平成16）年には、1995年に大学基準協会の加盟審査を受け、維持会員として承認されて以降10年が経過したのを機に「相互評価」を受けた。この「相互評価」を受ける際の、「点検・評価報告書」・「大学基礎データ」・「専任教員の教育・研究業績」・「各種添付資料」・「相互評価結果」等の資料を冊子『2004年（平成16年）度大学基準協会相互評価結果報告書』にまとめ、ホームページにも掲載し学内外に公表している。

今回、認証評価の申請にあたり、大学としての「到達目標」を明示し、担当各部署の教員と職員がチームを作り、全学一丸となって、それぞれの項目についての「現状の説明」を行い、さらに「点検・評価」作業の中で問題点を洗い出し、その中から「改善の方策」をまとめる中で、今後の本学の進むべき方向性を確認できたことは言うまでもないが、この様にして「自己点検・評価」を進めてきた結果を、ここに報告書として刊行しその成果を問うに至った。

そもそも京都外国語大学の前身である京都外国語学校は、戦後新生日本が平和国家として生まれ変わるには、国際間の協調と相互理解のもとに、平和な世界の実現をめざすことが重要であるとの観点から、外国語教育がもつ意義の大きさを思い、1947年5月に創立した。こうして本学は、外国語に堪能な人材をより多く世に送り出し、世界の平和の推進に役に立つことを願って、「PAX MUNDI PER LINGUAS—言語を通して世界の平和を—」を建学の精神とした。また、この崇高な目標の実現のためには、いかなる困難をも克服し、初志を貫徹しようとする「不撓不屈」の精神をそなえた国際人の育成に努めつつ今日に至っている。1959年に英米語学科、1963年にスペイン語学科（現スペイン語学科）、1966年にフランス語学科、1967年にドイツ語学科及びブラジルポルトガル語学科、1974年に中国語学科、1992年に日本語学科、2004年にイタリア語学科を設立し、合計8学科の多様な言語と文化が重層的に交錯する外国語の「総合大学」として、学術の中心として広く知識を授

け、豊かな教養に基づく円満な人格と国際的視野を養い、専門の外国語とその文化について深く研究教授し国際的活動を通して社会に貢献し得る人材の育成を目指している。また大学院に関しては、1971年に外国語学研究科英米語学専攻・フランス語学専攻・ドイツ語学専攻・ブラジルポルトガル語学専攻、1972年にはイスパニア語学専攻が開設され、2005年に、これまでの外国語学研究科修士課程を改組し、外国語学研究科博士前期課程と博士後期課程に異言語・文化専攻を開設した。

本学外国語学部の教育目的は、「専攻する外国語の学修を通して、高度な語学力、その地域・文化についての専門的知識及び国際社会で活躍するにふさわしい高い見識並びに豊かな教養を身につけた人材を育成すること。」にある。この目的を達成するため、本学の教育課程は、1. 専攻する言語の豊かな語学力修得を縦軸とし、専攻語学圏の地域研究を横軸とした高い専門性の修得、2. 多様な視点から異文化理解を深めるため、第2・第3外国語を修得することの積極的推進、3. 言語の背景となっている文化や社会に対する理解を深めるために、人文・社会・自然科学分野の教養教育の充実を図っていくことである。

さらに特記すべきは、「PAX MUNDI PER LINGUAS—言語を通して世界の平和を—」を建学の精神として展開される本学の教育は、外部からも評価されていることである。文部科学省が全国の大学の教育改善を目的として行っている3つの大きなプログラム「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」、「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に、本大学がエントリーした3つの取組み「官学連携による観光振興—多言語で京都を発信する—(現代GP)」、「チームティーチングによる二言語同時学習—外国語教育の新たな教授形態—(特色GP)」、「多文化共生時代の協働による日本語教員養成(教育GP)」が優れた事例として採択された。このことは、本学の教育がいかにユニークなものであり、かつ先駆的な取組みであることを示しており、同時に「教育」に対する前向きな姿勢が評価された結果であると考えている。

今日、大学が質の維持・向上に向けた努力を怠り、社会からの負託に応えられなければ、その淘汰は避けることはできない。このような現代社会のめまぐるしい変化に対応し、益々厳しさの増す競争社会の中で生き残るためにも、教育・研究活動の向上のための様々な努力を積み重ね、また、それらを検証するための自己点検・評価活動を最重要課題として位置づけ、取組みたい。